

伊吹と次期魔王であるディアボロはAKUdenald'sの出入り口を開けると店の外に出た。

「いやー、あんなに凄いポリウムだったとは驚きだよ！私と伊吹で半分にしてちょうどいいくらいだな！」

「でも凄く美味しかった。殿下、今日はおごってくれてありがとう。」

「いやいや、私も君と食事ができて良かったよ。」

ディアボロと伊吹は魔界の商店街の中を雑談をしながら歩いた。

その話は先程のジャンクフードショップのポリウムなら大食いのベルゼブブほどのくらい食べれるのか？という大食いメニューを食べた後の定番話を始めに魔界と人間界の違いや伊吹の生活のことなど、本当に誰が聞いても学生らしいありふれた話だった。

「そう言えば伊吹、今日はこれから何か用事があるかい？」

「え？これからの予定？」

「ああ。さっき伊吹は魔界での勉強が多くて大変だと言っていただろう？」

「うん。」

「だから、今から一度嘆きの館に戻って勉強道具を持って魔王城に来ないか？私でよければ分からないところを教えるよ。」

「本当！？ちょっと待っていて。」

そう言うと伊吹はD.D.Dを取り出しカレンダーアプリで今日の予定を確認した。

「・・・うん。夕食当番にもなっていないし、レヴィとゲームをやる予定も入っていないから大丈夫だよ。」

「良かった。じゃあ早速嘆きの館に戻って勉強道具を持ってこよう。」

「分かった。あ・・・でも・・・。」

「どうしたんだい？」

ディアボロは不安そうな顔でうつむく伊吹をのぞき込むように見た。

「だって、これから外出ってなるとみんな心配するし・・・マモンとかついてきそうだなーって。」

伊吹が不安そうにそう言うと、ディアボロは目を丸くし大きな声で笑った。

「確かにそうだな。なら私からルシファーや皆に話しておこう。夕食もうちで食べればいい。」

「ありがとう。」

伊吹はふーっとため息をつくときとテーブルの上に広げられたノートの上につつ伏せになった。

目の前には伊吹のテキストとディアボロのテキスト、そして伊吹が嘆きの館から持ってきた参考書やディアボロが書斎の本棚から取り出した参考資料であふれかえっていた。

「おや、もう疲れてしまったのかい？」

「・・・うん。」

伊吹がテーブルに顔を向けたまま上半身を起こすと目の前には赤いペンで注釈がいたるところにつけられたノートがあった。

注釈の内訳は大体人間の世界だと何に相当するのか？を始めとしたワタリにとっては理解しやすい内容にするための補足説明だった。

「なんで魔界の勉強ってこんなに難しんだろ？やる事がたくさんあるし、試験の範囲もとっても広い。」

「人間界でもっと少ないのかい？」

「それって勉強の内容？」

「ああ。」

伊吹はうんざりしたような顔で黒いインクに浸されている羽ペンを取るとインクのふちで余分なインクを落とした。

「大体魔界の半分かな？被っているのは歴史、数学、魔法がない代わりに・・・ああそうか・・・。」

伊吹はノートの隅に人間界での教科を書きながらがっくりと肩を落とした。

「魔界の方が圧倒的に教科が多いんだ。だって、甘言と魔法関連の教科はないもん。」

「ほう。甘言がない？」

ディアボロは紅茶を一口飲むと言葉を続けた。

「私が人間界の要人と会った時ずいぶん甘言が上手いなと思ったが、あれは学校で教わったわけではないのかい？」

「うん。大人になってから身に付けたものなんだと思う。」

伊吹も横に置かれた紅茶を一口飲んだ。

紅茶はすっかりぬるくなっていったが、独特の甘みだけは残っていた。

「となると、人間は一生勉強を続けるものなのか・・・それはそれでなかなか勤勉だね。」

「そうかな？勉強をしない人もたくさんいると思うけど？」

「伊吹は人間界では勉強を良くした方なのかい？」

「私は・・・。」

伊吹は紅茶カップを両手で持ちながら自分が人間界で通っていた大学でどの位の成績だったかを思い出していた。

「多分そんなに勉強をしている方じゃなかったかも？アルバイトもやっていたし、試験の成績や出席日数もちゃんと進級できればそれでいいや。とっていたから。」

「なんと。伊吹は留学生としてかなり成績が優秀と聞いているからってつきり人間界でも勉強をしている方だと思っていたよ。」

「それでもない。こっちで成績優秀なのはルシファーのおかげだよ。」

「なるほど。伊吹も他の兄弟たちと同じでルシファーに脅されているのかな？」

「ちょっ・殿下！」

笑いながら平和的とは言えない言葉で冗談を言うディアポロに伊吹は焦りを覚えながら紅茶を一口飲んだ。

ディアポロは王家の出身とは思えないほど豪快で快活な悪魔だったが、時としてこちらが驚くような言葉を使って冗談を言うところがあった。

コンコン

「どうぞ。」

ノックの音にディアポロが声をかけるとバルバトスが現れた。

「坊ちやま。夕食の支度が出来ました。」

「ありがとうございます。伊吹、今日はうちの料理長が一番得意な料理なんだ。ぜひ食べて行ってくれ。」

「ありがとうございます。」

伊吹は手に握っていた羽ペンをインク壺に戻すとさっと立ち上がってディアポロの後ろについて行った。

「美味しかったー。殿下本当にありがとうございます。」

「満足してもらえたみたいで良かったよ。料理長もきつと君が使い終わった後のお皿を見て喜ぶと思う。」

ディアポロはちぎったパンでソースが拭われた伊吹の皿を見ると満足げに微笑んだ。

「そう？だってこのソース本当に美味しかったんだもん。パンが欲しくなっちゃうよー。」

伊吹はそう言いながら口をナプキンで拭くと改めて膝の上に乗せデザートが来るのを待った。

メインデッシュの皿が下げられると入れ替わりで一口大にカットされたフルーツとホイップクリームがたっぷり乗せられたシュークリームが出てきた。

「わあ、凄く美味しそう。」

伊吹が目を輝かせながら目の前にあるシュークリームを見ているさまをディアポロはとても微笑ましいものを見るような顔で見ている。

「昔から食後のデザートはバルバトスがお菓子と決めていてね。いつもこの位の分量のお菓子を用意してもらうんだよ。」

「へえ……。殿下毎日これ食べているんだ……。」

「ああ。これだけはどうしても止められなくてね。」

伊吹は一瞬ディアポロの引き締まった肉体を見るとほつりとつぶやいた。

「……いいな……。」

伊吹のつぶやきはディアポロに聞こえたのか、ディアポロはいつものように大声で豪快に笑った。

「君もきちんと運動をしていれば大丈夫だよ。ベルゼブブに体の鍛え方を教えてもらったらどうだい？」
「・・・そうする・・・」

伊吹は少し切なげにため息をつくとき息を取り直してシュークリームを食べるべくフォークを手を取った。

「ところで伊吹。魔界では今の君みたいに自分の体形を気にする女性は『これは明日の魔法で消費する』と言ってからデザートを食べることが多いんだ。人間界にこれに近い言葉はあるのかい？」

「これは明日の魔法で消費する？」

伊吹は切り分けられたシュー皮にフルーツとホイップクリームを乗せながらディアボロに聞き返した。

「ああ。ものにもよるが魔法を使った後は魔力と一緒に体力も消耗するから少しやせるだろう？」

「うん。」

「だから魔界のご婦人たちは魔法を使ってダイエットをする人が多いんだけど、甘いお菓子はカロリーが高いのが多くてね。

大体体系を気にするご婦人は甘いものを食べないようにするんだけど、どうしても食べたくなったらそう言って食べるんだ。

人間界にもこれに近い言葉はあるのかな？と思ってるね。」

そう言うとディアボロはホイップクリームとフルーツが乗ったシュー皮をパクつと一口で食べた。

「『運動するから大丈夫』かな？」

「ああ。人間の世界ではそう言うのかい？」

「うん。後は『動くから平気』も近いかも？」

「なるほど。人間界では魔法がない代わりに運動でダイエットをするんだね？」

「そう。」

「とても面白いよ。ありがとう。」

伊吹とディアボロはそんなたわいもない話をしながらデザートを食べ続けていたが、二人の皿からはあれよあれよとシュークリームが消えて行った。

「あー美味しかった。殿下今日は本当にありがとう。」

伊吹が再び口元をナプキンで拭くとディアボロも同じように口元をナプキンで拭いた。

「どういたしまして。私も君と食事が出来て本当に嬉しいよ。」

「そう言えば今何時かな？・・・やだ！もう8時になっている。」

伊吹は腕時計を見ると急いで椅子から立ち上がった。

「もうそろそろ帰り支度しなきゃ。あんまり遅いと明日学校に遅刻しちゃう。」

「なら伊吹、いっそ今夜は魔王城に泊まっていくのどうだい？」

「え？」

言葉に驚いて伊吹がディアボロを見るとディアボロはとて寂しそうな目で伊吹を見ていた。ディアボロは椅子から立ち上がる。伊吹の手を取ってその手の平にキスをした。

「伊吹、私は今夜君を嘆きの館に返したくないんだ。」

伊吹が突然の展開に声も出せずにいるとディアボロは言葉が続けた。

「伊吹、私は君を始めてみた時からずっと興味があったんだ。」

「・・・興味？」

「ああ。興味だ。」

そう言うとディアボロは伊吹の手のひらを自分のほおに当て、愛おし気に両手で包んだ。

「最初この興味は君が人間で、私から見ると珍しい存在になるからだろうと思っていた。

でも、気がついたら恋愛感情になっていて、もう今となっては君のことを考えない夜はない。

伊吹、今夜は私のわがままに付き合ってもらっても良いかい？出来れば今は・・・君を嘆きの館に返したくない・・・。」

ディアボロは首を横に向け自分のほおに当っていた伊吹の手のひらに再びキスをする。伊吹の反応を見るように目を開けながらそっと伊吹に顔を向けた。

伊吹は初めて見るディアボロの様子に目を反らせずにいた。

伊吹の顔を見るディアボロの顔は間違いなくいつもと同じディアボロの顔だった。

しかし目は何とも言えない切なさを抱えつつも真剣そのもので、ディアボロの言葉は本当であることをはっきりと証明していた。

伊吹はディアボロの言葉に対して返事をしなければならぬと思いき口を動かさそうとした。

しかしディアボロの体からだよってくる人間の男とは全く違う色気を含んだ気配に圧倒され伊吹は口を動かすことも声を発することもできなかった。

伊吹は水中にいる魚のように口を何回かパクパクと動かすと、もどかしそうにディアボロの胸の中に倒れ込んだ。

「おっと。」

ディアボロは伊吹の体を受け止めると少し考えた後言葉をかけた。

「・・・伊吹、これは私のがままを聞いてくれる。という返事ということで良いのかな？」

「・・・うん。」

「・・・ありがとう。」

伊吹がディアボロの体に抱きつく。ディアボロも伊吹の体にそっと腕を回し抱きしめた。

「伊吹、このまま君を抱きしめてしまいたいが、ここにいとそそのうち誰かが片付けで来る。だから私の部屋にこないか？そこでたっぷりこの続きをしたい。」

「うん。」

「うん。」

伊吹はディアボロの提案に承諾の言葉をかけるとディアボロの体から離れ、ディアボロのエスコートでディアボロの寝室に向かった。

再び体を抱き寄せ大きくもなければ小さくもない胸に顔をうずめる。

胸に顔をうずめたまま深呼吸をすれば甘くよい香りが鼻から頭の中に向かって突き刺すような快感を伴って感じられた。

(ああ・・・)

ディアボロは再び伊吹の体を抱き寄せると敗北を認めた時思わず吐く切ないため息をついた。

それは伊吹のフェロモンの魅力に負けすっきり骨抜きにされてしまったことによる敗北感だったから、ただディアボロの心に伊吹に対する愛おしさを甘く染み渡らせるだけだった。

「伊吹、抱かせてくれないか？」

ディアボロは思い切って可能な限り単刀直入に伊吹に性行為をしたいということを訴えた。

ディアボロの頭の上から伊吹の「え・・・？」という戸惑ったようにも聞こえる声が聞こえたが、ディアボロの陰茎はそんなことにお構いなしと言わんばかりに勃起していた。

伊吹はディアボロの首に手を回したまま突然の展開に頭の中での理解が追い付いていなかった。

しかし少しの間考えるとディアボロの言葉は性行為を要求するものであることを理解しまんざらでもない気持ちになった。

「いいよ。」

「ありがとう。」

伊吹が了解の言葉をかけるとディアボロはさっと伊吹の体をお姫様抱っこで抱きかかえ自身のベッドに運んだ。

白い清潔なりネンが包むマットレスの上に横たえらえると、伊吹はディアボロから靴を脱がされながら見慣れない高さの天井とそこから吊るされた天蓋からたれる重厚な黒のカーテンをじっと見つめていた。

両足から靴が脱がされ少し経つと、ディアボロの顔が伊吹の視界に現れた。

(あ・・・)

伊吹は視界に入ったディアボロの顔を見ながらなんとも言えない魅力を感じていた。

伊吹の視界に入るディアボロの顔は、間違いなくいつもと同じ少しエラが張ったディアボロの顔だった。

なのにルシファーと比較すると小さな目からは重厚でどっしりとした引力としか表現のしようのない気配がただよい、ただ一人伊吹だけを欲していた。ディアボロの手が伊吹のブラウスのボタンを一つ、また一つと外していく。

伊吹にとってそれは人間の男で経験したことのあるおなじみのことだったが、ディアボロの場合はなぜか心臓の鼓動が早くなった。

心臓の鼓動はボタンを外された数だけ増して行き、最後のボタンを外すためにスカートからブラウスが引き出される頃には自分の頭の中に心臓の鼓動の音が響いてくるかようだった。

